書　評

佐川 徹著、『暴力と歓待の民族誌　東アフリカ牧畜社会の戦争と平和』、昭和堂、2011 年、437 頁、6,500 円+税

宮脇　幸生

このところ、日本語で書かれたエスノグラフィの質の向上には、目を見張るものがある。その中でも本書は、間違いなく最上級にランクづけることができるであろう、とてもすぐれた民族誌だ。評者は、著者の研究したダサネッチの近隣に住み、友好的な関係のあるホールという農牧民を研究している。このあたりの民族については詳しく研究してきたつもりだったが、その評者にとっても、本書を読むことは、新たな発見に満ちたきわめて刺激的な経験であった。

著者の佐川氏は本書で、エチオピア西南部の最辺境に暮らす農牧民ダサネッチとその近隣諸民族との、戦争と平和の間を揺れ動く動的な関係を規定するメカニズムを、緻密なデータ分析にもとづき、ていねいに解き明かしている。これまでエチオピアの西南部低地は、中央政府の統治が及ばない辺境の地であり、そこに居住する牧畜民たちは、互いに暴力的な紛争を繰り返す野蛮な民であるとみなされてきた。人類学者たちの研究も、このような紛争を、生態学的な要因や、文化的な要因、さらに近年では植民地支配や国家支配などの政治的な要因によって引き起こされるものとみなし、ある意味でこうした暴力的なイメージを強化していた。それに対して著者は、民族間の暴力的な関係だけでなく、日常的な関係にも注目すべきこと、そしてそこでは、民族の境界を越えて形成される間民族的な絆が重要な意味を持つことを指摘する。さらに平和と暴力の間を揺れ動く集団間の関係を理解する際には、生態環境や文化的規範、外部からの政治的圧力だけでなく、それに参与している個々人の意思決定と、それを支える社会的メカニズムに注目する必要があるという。これまでの研究が見逃していた点を、鋭く突く指摘だ。以下に本書の内容を簡単に紹介し、著者の議論を追ってみよう。

序章では、これまでの紛争研究が検討される。著者はまず、これまでの人類学が「未開社会」における集団間の関係を、もっぱら戦争の側面から明らかにしようとするホッブズ的人間観にもとづくアプローチと、平和構築の側面から明らかにしようとするルソー的人間観にもとづくアプローチに分裂していたことを批判的に紹介し、紛争と共存の両方の側面を射程に入れた研究の必要性があると主張する。一方これに対して近年、集団間の関係を、相互の交流とそれを断ち切る境界構築のダイナミズムから明らかにしようとする研究が注目されてきている。だがこれらの研究には、以下の問題点があると著者は指摘する。まず、このアプローチは機能論的・目的論的な色彩が強く、戦争に参与している個人の主体的選択を等閑視している点、また戦争における暴力が個人に与える影響を十分に考慮していない点、そして戦争から平和へ向かうプロセスの分析が十分になされていない点、そして当該社会への歴史的な影響が考慮されていない点である。

他方で東アフリカの牧畜社会研究においては、集団間の紛争だけではなく、集団を超え

た絆の形成・維持に焦点を当てた研究がなされてきた。だが近年いく人かの研究者（評者も含む）は、このような絆は植民地支配や国家支配によって衰退し、集団はより境界のはっきりしたものに変質していると指摘している。著者はこうした研究にも、以下の問題があるという。第一に、植民地支配以前の民族間関係を、必要以上に平和なものとして描いている点、第二に、植民地支配や国家支配の影響のみによって、集団を超えた絆が切断されたことを示唆している点、そして第三に、このような絆の切断は回復不可能で非可逆的な過程であったと示唆している点である。

これらの議論を前提としたうえで、著者は、エチオピア西南部辺境のダサネッチにおいて、隣接集団との戦争状態と共存状態という揺れ動くフェーズが、外部の政治的影響や集団の社会的・文化的規範の影響を受けつつも、個人の主体的な選択によって、いかなるプロセスで達成されていくのか、またそのような選択は暴力の体験によってどのように変容していくのかを、詳細にあとづけようと試みる。

第 2 章では、ダサネッチ社会の概要が示される。東アフリカの牧畜社会は、これまで一般に、家父長制社会だと言われてきた。年長の男性たちが権力を握り、若年者や女性を支配する社会だということである。けれども著者は、ダサネッチの年齢組織や親族組織を詳しく分析することで、ダサネッチ社会では、年齢集団や親族集団が個人を結集し、一元的な権力の位階に秩序づける力は弱く、むしろ各個人がその時々の場面で、事情に応じて多様な選択・決定を行うことを可能にする弾力性があることを指摘する。そしてそれを、個人が出発点となり、さまざまな関係や現象が構成されていく「個人創発的な社会構成」として特徴づける。ダサネッチ社会の分析としては、多様な個人間の紐帯を記述し、ここから権力の分散性を論ずるアルマゴールの研究がよく知られているが、記述があまりにも個人間の紐帯に焦点化しすぎ、他の社会組織への目配りが十分ではなかった。著者の記述はアルマゴールのものよりも、より包括的で、説得力がある。そしてこの「個人創発的な社会構成」という特徴づけは、ダサネッチと近隣集団の関係性がどのように構成されていくのかを分析する際の、重要な伏線となる。

第 3 章では、ダサネッチの歴史が、その生成から、19 世紀末のエチオピア帝国による征服と支配、イタリアによる支配、社会主義政権による介入、現政権によって強まる国家支配へと、順を追って示される。それに加え、民族間紛争を大きく変えた銃の導入の歴史と、隣接諸民族間の戦争の詳細な歴史も合わせて記述されている。著者によれば、ダサネッチ社会への国家の介入は、他のエチオピア地域に比べると相対的に小さかった。もちろんこの地域も、国家からの介入や放置、銃の流入によって、集団間の敵対関係が強化され、戦いの強度が激化しながら、暴力的な紛争が常態化した地域である。だがここで著者は、このような紛争を出来事として編年順に並べる歴史記述に対しても、問題があるという。それは、紛争の歴史しか語らず、日常的に継続され、また紛争の後に再構築される集団を超えた絆を捕らえそこなうからである。

第 4 章では、戦争に参与したダサネッチの人々が、そこでどのような体験をし、それが次の戦争の際にどのような影響を与えるのかを分析している。著者はダサネッチにおける戦争の方法と、戦うことを動機づけるさまざまな文化装置を詳細に記述した後に、174 人の男性からの聞き取りにもとづいて、戦争への参加頻度やライフサイクルと参戦の関係、ダサネッチの地域集団と戦った隣接民族との関係などについて緻密な分析を行う。この分析

は非常に興味深く、本書のクライマックスの一つだろう。なかでも印象深いのが、戦争に参加した経験がありながら、その後戦争への参加を回避するようになった男性たちの語りである。彼らは戦場での恐怖と仲間の死、死者の家族の悲哀、さらには仲間の裏切りなど、悲惨な経験を語る。そして彼らは自分を「臆病者になった」と語りながらも、自分は「熟慮し、成長した」ので、戦争には行かないのだと主張するのである。

ここで著者は、二つの疑問を提示する。一つは、ダサネッチでは男性が戦争に参加することを称揚する文化があるにもかかわらず、「戦争を否定する」男性たちは、いかにして他の人々から受け入れられるのかという点、もう一つは、このように「戦争を否定する」人たちがいるにもかかわらず、ダサネッチではなぜ平和運動が組織化されないのかという点である。それを著者は、ダサネッチにおける個人の自己決定を尊重するエートスに求められると指摘する。ダサネッチでは、個人の性格や感情、考えなどを表現するときに、「胃」ということばを使う。そして、他者と異なった決断をするときには、「私の胃とあなたの胃は違う」ため、何を行うかは「わたしの胃だけが決定する」という。ダサネッチには、人々を戦争へ均質的に動員する制度化された調整機構がないだけでなく、相手の「胃」の自己決定を尊重する態度も共有されているのである。つまり、個々人の多様性を許容し、他者の自立性を尊重するエートスがダサネッチにはあり、それが戦争へ行かない男性たちを許容することにもつながり、またそれらの男性たちが戦争を好む他者に、平和を強いないということにもつながっている。このようなエートスが維持されるのは、第 2 章で述べられたダサネッチの弾力的な「個人創発的な社会構成」のゆえであろう。

第 5 章では、民族集団の境界を越えた横断的な紐帯が示され、戦争の敵対的な関係と平和なときの友好関係が、どのようなメカニズムで相互に交代するのかが明らかにされている。近年のこの地域の牧畜社会研究は、国家支配の影響により、民族境界を越えた絆が切断され、民族間の紛争が増加したとしてきた。しかし著者は綿密な調査により、ダサネッチは友好的な集団とだけでなく、敵対的な民族集団とも多くの友人関係や親族関係を結んでいることを明らかにし、このような見方の一面性を批判する。

ダサネッチにおいて民族境界を越える関係が結ばれる背景は、生態環境の違いに応じてそれぞれの集団がもつ生態資源が異なるため、経済的な相互依存が生じること、隣接集団とは同じ地域の牧畜社会ということで、共通する文化論理をもっていること、また「個人創発的な社会」であるダサネッチでは、個人がたとえ敵対民族と友人関係を持っても、それを批判されることはないこと等による。しかし著者が問題とするのは、このような平和的な関係が、いかにして敵対的な関係と両立し、時に応じて戦争と共存という異なったフェーズの間を移行するのかという点である。

著者の調査によると、ダサネッチは戦争相手となる民族集団と友人がいる民族集団はおおむね一致している。つまり、何らかの交流がある集団が、戦争相手ともなり、また友人を持つ集団ともなるのである。相互に接触がある場合、そこにはトラブルが起き、殺人が起きることがある。そうしたトラブルが起きると、接触のある共住地帯から人々は撤退し、呪術的な境界がひかれる。そしてそこから、戦争が勃発することがある。それならば、敵対集団に友人を持つ人は、戦時にどのような対応をするのか。戦場で万が一友人に遭遇した場合は、彼らは友人を殺すことを拒絶する。そして周囲にいる他のダサネッチも、そのような行為に制裁は加えない。だが彼は、他のダサネッチがその友人を殺してしまう可能

性に対しては、なんら対処することはない。ここでも、徹底的な個人主義が貫かれるのである。戦争の後にはしかし、平和が回復される。長老たちが平和儀礼のために相手の集団を訪れることもあれば、より日常的・個人的なレベルで、人々が放牧や友人の訪問のために、相手の集団と接触を始め、それが共住につながることもある。このように、戦争を行う相手の集団は、他方では平和時には、歓待をする友のいる集団でもある。

このような敵対と共存の間を揺れ動く関係を、著者は、三つの観点から考察している。第一は、ともに家畜とともに生きているという「強固な共同社会意識」である。家畜に依存し、家畜に導かれて互いに遭遇し、共住し、戦う、そのような人間として相互に運命を共有した同朋と認識している、と著者は示唆する。この共同社会意識は、そのような牧畜民的ライフスタイルを持たない高地人との対比においても、意識されているという。第二は、「共在性」である。これは、相互行為を行う個人が互いの共感・暴力に対して開かれた状態で、同じ時を生きるということを意味している。この「共在性」概念をさらに相互の接触的な関係性に焦点化したのが、第三の「可傷性」概念である。

「可傷性」とは、人間は他者とともに生きる必要があるが、他者との相互作用によって自らの心身も傷を負うこと、また逆に、他者の苦しみに共感することを通して、自らも傷つくことを、指し示す概念である。「可傷性」を最小限にとどめるには、集団間の境界を切断してしまい、相互交流を忌避する必要がある。そうすれば自らが傷つけられることは回避できるが、また他者の苦悩に対する共感も縮減する。ダサネッチは、隣接集団に対して、集団レベルで敵と自分たちを異なった空間に配置し、「可傷性」を縮減する、というやり方は、とってこなかった。むしろ「可傷性」を引き受けて生きてきたのである。そしてそのことは、ふたたび、個人の行為選択の幅を広く残したまま、その場で対面した他者が求める関係形態に呼応して行為を遂行していくという、ダサネッチのエートスと結びついているのである。

第 6 章では、近年の外部アクターによる紛争調停の介入が、民族間関係にどのような影響を及ぼしているのかが示される。著者は 2006 年に行われた政府によるふたつの平和会合の分析を行い、そのどちらもが、従来の牧畜民による平和会合の形式を流用しながら構築されていることを指摘している。興味深い点は、会合の中で語られたり行われたりしたことだけではなく、会合の開催自体が、集団境界を越えた友好的な相互往来を活性化する作用を持っていたという指摘である。また会合の開催地自体が、実際の紛争発生地の近くになっており、まさに暴力的な関係と協力的な関係がともに存在する地域において、平和的な共在性を促進するのに大きな役割を果たしているのである。さらに著者は、近年のエチオピアにおけるエスノ・ナショナリズムの勃興について触れている。このダサネッチにおける紛争から平和に至るメカニズムを考慮するのなら、民族集団間の境界を明確化し、相互に住み分けをするような方向性をとるのではなく、むしろ他者と共在する姿勢の中で生じる紛争を、集団的な暴力に転化することを防ぎながら、同時に存在する協力的な絆のポテンシャルを高めていくことが必要だと論ずる。

以上、駆け足で著者の議論を追ってきた。冒頭に述べたように、評者はダサネッチの近隣集団であるホールという農牧民を研究しているが、同じ地域、同じような牧畜文化を共有する集団を研究してきたものとして、著者のこの著作を読み、正直、舌を巻かざるを得なかった。この地域（もちろん東アフリカの他の地域も含む）の牧畜社会に関しては、多

くの研究がなされてきた。けれども、ここまでシステマティックなデータにもとづき、民族間紛争のダイナミズムを明らかにした研究は、今までなかったのではないだろうか。もちろん民族間紛争についての調査は多くの研究者が行ってきたし、襲撃や略奪・殺人の方法や、その文化的意味づけについても、多くの調査結果がある。また、敵対集団がまたしばしばボンド・パートナーシップと呼ばれる友人・交易関係を結ぶ相手であることも、この地域を調査している研究者なら、おなじみの点である。

しかしこうした集団間を超えた絆と戦いの関係を、ここまで徹底して分析した研究、これほど多数のインフォーマントから、これほど詳しく個人個人の具体的な経験のレベルにまで落としこんで聞き取りを行い、分析を行った研究を、他に評者は知らない。そしてそこから明らかにされた、戦場での悲惨な経験の語りからは、ダサネッチがカテゴリーとしてではなく、一人ひとりの個人として私たちの前に姿を現すかのような印象さえ受ける。それは、戦争体験をつづった私たちの社会におけるすぐれた小説やエッセイを思い起こさせさえする。「可傷性」という概念を通して、私たちとダサネッチは、実存の深いレベルで、つながっているような感覚を覚えるのである。

さらに「可傷性」を引き受ける態度を、ダサネッチの「個人創発的な社会構成」と結びつける論理構成、さらにそれを敵対と共住の間を揺れ動くメカニズムと結びつける点も、非常に興味深く思った。ここで私たちは、実存レベルでの共感と同時に、やはり社会構成の違いによるエートスの相違、社会の作動の相違にも触れるのである。

このように、評者はこの研究の分析の深さと的確さには、目を見張る思いである。だが他方で、この地域の牧畜民の集団間関係の歴史的変化ついては、評者は著者とは考えを異にする部分があった。著者は、この地域の民族間関係の変化を国家や植民地支配から解釈する先行研究について、植民地支配以前の民族間関係を、必要以上に平和なものとして描いており、それ以降の紛争の強度の増加を、国家・植民地支配以降の「民族のハード化」から説明していると批判している。けれども、植民地化以前にも民族間の紛争は頻発していたということは、これら先行研究でも共通の認識だと思うし、またトゥルカナ湖周辺で「民族のハード化」が起きたと論じている先行研究は、ないのではないか。

むしろ重要な点は、民族間の紛争の強度よりも、そのパターンが、国家や植民地支配の直接・間接の影響を受けて変化するようになったという点であると評者は思う。このことは著者も書いているように、ダサネッチでも例外ではない。

もう一つは、やはり、こうした国家・植民地支配が、それ以前には見られたダイナミックな民族の移動や再編を、抑制するような効果を持っていただろうという点である。この点でも、やはり植民地支配や国家支配が、民族間関係に及ぼした影響は大きいと、評者は考える。著者ももちろん、大規模な集団単位の移動は「19 世紀末のランダルとクォロの移動以来起きていないようだ」（300）と指摘している。だが最後に起きたのは、エチオピア帝国の征服時、19 世紀末から 20 世紀初頭である。このときは近隣民族のハマルもホールも離散し、ダサネッチをはじめとする周辺の民族のテリトリーに大量移住した。干ばつや疫病の流行、戦争によって、集団単位の移動が行われ、民族が再編されるのは、19 世紀以前では珍しいことではなかった。だがエチオピア帝国侵入時には、同じように帝国に支配されている寄留先の集団で、帝国と寄留先の集団による二重の支配に苦しみ、結局もとの地に戻ったということを、評者はハマルとホールでは聞いた。20 世紀のエチオピアでは、地

理的環境の相違により、帝国支配の強度やシステムは異なっていた。ダサネッチはその中でももっとも支配の弱い地域だった。だがそこから近隣に目を転ずると、異なる支配システムが広がり、それが民族間の移動を抑制していたとはいえないだろうか。

このように、植民地・国家支配の影響については、評者は著者と、少し意見を異にする部分はある。けれども言うまでもなく、この研究の真価が、それで損なわれることは全くない。これはエチオピア牧畜社会、いや東アフリカ牧畜社会のエスノグラフィとして、また戦争のエスノグラフィとして、新たなスタンダードとなるすばらしい研究である。